

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 1930年代の帝国日本におけるモダニズムの諸様相
——空間・メディア・植民地——

氏 名 張 ユリ

論 文 内 容 の 要 旨

本論文では、1930年代における都市空間とメディア、植民地を軸にして、日本のモダニズムについて考察を行った。日本の1930年代は、「昭和モダニズム」に代表される消費と享楽を中心とした風潮が最盛期に達した前半期と世界を相手にする戦争に向かおうとしてファシズムが激化していった後半期に断絶された形で認識されてきたが、本論文は1930年代という時代が如何に捉えられるかを明らかにすることを目的とした。また、そのような断絶の中で風俗的な流行という側面のみが強調されて語られてきた1930年代前半を象徴するモダン文化及びモダニズムを再評価することをも試みた。

従来のモダンに関する研究の大半は文化論的・都市論的研究に留まっており、日本文学におけるモダニズムは生活様式の記号として捉えられてきたといえるが、本論文では1930年代におけるモダニズムの諸様相を見出すために、空間・メディア・植民地という側面から、帝国日本のモダン及びモダニズムを考察した。

まず、空間を一つの軸としたのは、1930年代のモダン文化の一つの様相として近代都市文化を挙げることができるということ以外にも、近代に入り、様々な作家や思想家たちが自分を取り囲んでいる空間に注目し、時代の中で変化していく空間の形や意味について考察を行ったことが、その理由として挙げられる。ジョイスの『ユリシーズ』やベンヤミンの『パサージュ論』のような試みがヨーロッパを中心として繰り返られるなか、日本においても空間に関心を示す人々が増えていった。今和次郎が「考現学」という名のもとで「銀座街風俗」を発表した1925年以来、近代都市空間、とりわけ関東大震災後の東京は「モダニズム」の象徴として文学やジャーナリズムによって消費されるようになるということを踏まえて、本論文では1930年代のモダニズム文学における近代都市の空間表象及び作家の都市経験に注目して考察を行った。

次いで、メディアに関しては、1930年代は雑誌の創刊が盛んになった時期であり、創刊ラッシュと既存の婦人雑誌や『キング』などの大衆雑誌の人氣が相俟って雑誌ブ

ームを起こすことになるが、その中で、タイトルに「モダン」を掲げてモダン文化を取り上げる雑誌群が登場する。本論文では、その雑誌群をメディアにおけるモダンの一つの集团的動きとして捉え、「モダン」系雑誌と命名した上で、「モダン」系雑誌、とりわけ『モダン日本』を研究対象にして、これまで注目されなかった 1930 年代の雑誌メディアにおけるモダン文化を明らかにすることを試みた。

最後に植民地という観点については、1930 年代におけるモダニズムを考察するに当たり、その対象を日本本土に限らず、日本文化の影響圏全体を想定するという意味で、植民地を含む帝国日本を研究対象とし、その中でも植民地朝鮮におけるモダニズムについて考察を行った。とりわけ、1930 年代における朝鮮文学者の東京経験と朝鮮モダニズム文学における都市空間表象に注目したが、そうすることによって、帝国と植民地の関係を従来のように文化の受容と変容という側面で捉えるのではなく、帝国のモダンの体験者としての植民地青年を想定して、その体験の前後の変化を追うことで、モダンが帝国という枠組みの中で如何に現れてくるのかを立体的に捉えようとした。

以上のような目論見を想定する本論文は三部で構成されている。まず第 1 部の「モダニズム小説における都市空間表象」では、都市空間に注目しているアンソロジーとしては 1930 年代における最初の試みといえる『モダン TOKIO 円舞曲』と堀辰雄を取り上げて、1930 年代の日本モダニズム小説における都市空間表象について考察した。1930 年 5 月に春陽堂から刊行された『世界大都会尖端ジャズ文学』（全 15 巻）の第 1 巻である『モダン TOKIO 円舞曲』には、川端康成の「浅草紅団」や堀辰雄の「水族館」など、1930 年代の東京を取り上げている代表的なモダニズム小説 12 編が収録されているが、それらの作品は各々の作品論という形で研究されてきてはいるが、一つのアンソロジーとして『モダン TOKIO 円舞曲』に注目している研究は乏しいといえる。このことを踏まえて、第 1 章「『モダン TOKIO 円舞曲』に見られる 1930 年、東京——浅草・銀座・丸の内の表象を中心に——」では、『モダン TOKIO 円舞曲』の諸作品に現れている東京の表象を分析し、当時のモダニズム文学者たちが共有していた近代都市東京についての認識を考察した上で『モダン TOKIO 円舞曲』におけるアンソロジーとしての意義の究明を試みた。第 2 章「堀辰雄文学の空間表象——初期作品から「軽井沢文学」への移行をめぐって——」は、堀辰雄文学において、初期短編小説群は近代都市東京を、「美しい村」から始まって『風立ちぬ』などに至る代表作は軽井沢をその背景としており、両作品群は断絶したものとして語られてきたという点に着目した論考である。ここでは堀辰雄文学に現れている東京と軽井沢の表象の包括的な分析を行い、その特徴を明らかにした上で、作家自身がデビュー作として認めている「聖家族」の空間設定を分析した。そこで、作品に現れている東京から軽井沢へ移行していく空間の問題を考察することによって、堀辰雄文学がモダン文化を取り上げる文学から叙情的・絵画的といわれる〈軽井沢文学〉に変貌する過程に見られる作家

の近代批判の意識を明らかにした。

次いで、第 2 部「雑誌メディアとモダン文化」においては、『モダン日本』を中心に「モダン」系雑誌に現れたモダンを追究した。第 3 章「雑誌『モダン日本』が構築した「モダン」——雑誌のブランド化と読者戦略——」では、1930 年代に刊行され、モダン文化を取り上げた「モダン」系雑誌の中で最も影響力があったと思われる『モダン日本』と他の「モダン」系雑誌を比較分析した上で、『モダン日本』の特徴として「雑誌のブランド化」と「読者戦略」を挙げて、『モダン日本』が構築したモダンの特質について究明しようとした。また、モダン文化において欠かせないものの一つとして女性の存在を挙げることができるが、第 4 章「「エロ・グロ・ナンセンス」の時代を生きる女性文学者たち——「モダン」系雑誌に見られる女性文学者像とその実体——」では、そのようなことを踏まえて「モダン」系雑誌の中に見られる女性文学者に注目した。「エロ・グロ・ナンセンス」を掲げた文学及びメディアの中の女性は主体ではなく、欲望の対象として描き出されている場合が多いといえるが、客体でありながら表現の主体でもあった女性文学者たちは「エロ・グロ・ナンセンス」の時代を如何に生きていたのだろうか。ここでは「モダン」系雑誌における女性作家の文章を分析することで、モダン文化の時代における女性文学者に与えられた役割と彼女たちの自己認識について明らかにした。第 2 部の最後である第 5 章「1930 年代後半における雑誌『モダン日本』の編集体制——前線と銃後、植民地朝鮮をめぐって——」では、『モダン日本』が戦時下体制に入るにつれて見せる変化を考察することから、モダンがファシズムに変わる経緯の一断面を探ろうとした。「昭和モダニズム」を標榜する雑誌として出発した『モダン日本』が、「支那事変」勃発直後から戦時下体制に入って 1943 年に『新太陽』に改題するまでの時期にプロパガンダとしての役割を果たしたことに注目して、先行研究であまり注目されてこなかった『モダン日本』のプロパガンダ化に焦点を当て、戦時下における『モダン日本』の編集体制の特徴について考察を行った。

最後の第 3 部は「植民地朝鮮青年とモダニズム」と題しているが、植民地青年の東京経験とモダニズムの関係が中心になっている。第 6 章「「欲望」と「生活」の狭間を歩く——朴泰遠「小説家仇甫氏の日」と堀辰雄「不器用な天使」における近代都市空間——」では、1930 年代における帝都東京と植民地の首都、京城の関係に注目して、考現学(モデルノロジー)的な観点から書かれたといわれる堀辰雄の「不器用な天使」と朴(パク)泰(テ)遠(ウォン)の「小説家仇甫氏の日」に現れている都市空間表象を両作品における遊歩者の有様に注目して比較分析した。さらに、「小説家仇甫氏の日」における東京経験の現れ方を分析することで、植民地青年における帝都東京の意味を探ろうとした。第 6 章において考察対象とした朴泰遠の他にも、植民地青年の東京経験は文学作品にもよく描かれているが、1930 年代の朝鮮文学者における日本及び

東京経験は、主に留学経験を中心に言及されてきたといえる。しかし、留学は学校制度に基づいた経験であり、日本滞在期には留学生組織を中心として活動するなど、近代的な制度や共同体としての経験が個人の経験に及ぼした影響は大きいと考えられる。以上のことから、第7章「1930年代における朝鮮文学者の一個人としての東京経験——林和と李箱を中心に——」では、朝鮮文学者における一個人としての東京経験に注目し、個人的な目的で渡日し東京を経験した二人の文学者、林(イム)和(ファ)と李(イ)箱(サン)を研究対象として、彼らの作品に現れている東京を分析することで、1930年代の植民地青年における帝都東京の意味について考察を行った。最後に第8章「馬海松における国家観形成——生存をめぐる民族と国家の問題を中心に——」では、日本文壇の中心でモダン文化を牽引した馬海松が朝鮮に帰った後、急進的なナショナリスト及び反共主義者になる過程を「敵」を認識することによる国家観の形成という観点から分析した。その分析を通じて、近代都市東京に憧れた1930年代の朝鮮のモダニストが、実際に対面した東京で失望と挫折を味わうことでモダニストから脱却していくという典型的な枠組みとは異なる、最後まで居残った植民地モダニストの終焉を究明した。